

ISMIR 2009 の論文審査過程を振り返って

平 田 圭 二^{†1}
KEIJI HIRATA^{†1}

ISMIR 2009 では、論文投稿締切 5 月 22 日までに 212 件の論文が投稿され、7 月 23 日に 123 件の採択論文が発表された。このおよそ 2 ヶ月の間、筆者を含む 2 名のプログラム委員長、22 名のプログラム委員会メンバ、214 名の査読者が論文審査に当たった。

近年の ISMIR は、二重匿名 (double-blind) 査読やりバツタル (rebuttal) など、より公正な審査を実現するための仕組みが取り入れられ、「良い」論文を書けば採録されるような状況へと向かっていると思う。しかし、最終的に人が論文採否の判定を下す時には「良い」論文の評価基準に、明示的な暗黙的な様々な要素が関連してくることが不可避である。今回、プログラム委員長としてその審査過程を最初から最後まで体験したことで、著者の立場から「良い」と考える論文と、査読者、メタ査読者等審査員の立場から採録と判定する論文には何か食い違うものがあるように感じたので、本講演ではその違いについて説明できればと考えている。

ただしここで 1 つ誤解して頂きたいのは、筆者は、ISMIR に採録されるための小手先の論文記述テクニックを解説したいわけではないということである。広く世の中に公開するに足る優れた研究成果を上げるには、良い研究をした上で、さらに採録される論文を書かねばならない。本講演が、もし日本における音楽情報処理研究の発展の一助となれば望外の喜びである。

本講演では、ISMIR 2009 に関わっていただいた著者、査読者、プログラム委員、関係者全員のプライバシーを尊重します。どうぞご安心下さい。

^{†1} NTT コミュニケーション科学基礎研究所 NTT Communication Science Laboratories